

国立国語研究所学術情報リポジトリ

裂き織り・サックリの分布図を読む：
名称と指示物の分布，多様な裂き織りの視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-07-12 キーワード (Ja): 民俗地図, 裂き織り, サックリ, ツヅレ, 指示物 キーワード (En): folklore maps, rip weaving, sakkuri, cuzure, referent 作成者: 福嶋, 秩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000279

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



裂き織り・サックリの分布図を読む ——名称と指示物の分布、多様な裂き織りの視点から——

福嶋秩子

新潟県立大学 名誉教授／国立国語研究所 共同研究員

要旨

仕事着の名称として知られるサックリはサキオリ（裂き織り）が語源である。名称の分布図からその変化のプロセスをたどることができるが、指示物の分布図も描き、指示物の変化のプロセスについてもあわせて考察した。また、裂き織りの名称として使われるツツレなどの別語についても同様の分析を行った。古木綿布を裂いたものを横糸とするのが典型的な裂き織りであるが、それ以外のものも裂き織りの名称で呼ばれることがあることから、多様な裂き織りの視点から名称ごとに考察し、指示物の変化の過程を明らかにした*。

キーワード：民俗地図、裂き織り、サックリ、ツツレ、指示物

1. はじめに

サックリとは北陸地方における仕事着の名称である。山崎（1995）掲載の北陸地方を中心とする地域のサックリの呼称の分布図とその素材の分布図を目にした私は、サックリの全国分布図を作り、語源とされるサキオリ（裂き織り）からどのように変化し、この分布が生まれたかを明らかにしたいと思い、データの収集と地図化を始めた（福嶋 2023b）。

「裂き織り」と「サックリ」は『日本国語大辞典』（ジャパンナレッジ 以下同様）で以下のように定義されている。なお、ここにある「山苧（やまそ）」は、「からむし（苧）」の別称である。

さきおり【裂織・割織】 古い布地を細長く裂いたものを緯（よこいと）として、山苧（やまそ）の洪染めを経（たていと）にして織った織物。農夫、山男などが着用した。さっくり。さっこり。つづれ。びろ織。

さっくり【裂織】（「さきおり（裂織）」の変化した語）(1)「さきおり（裂織）」に同じ。(2) 裂織でできた筒袖・腰切れなどの百姓の仕事着の一種。

裂き織りは、横糸（緯糸）として古木綿布（木綿の古着）を細長く裂いたものを使うことが特

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多様な語彙資源を統合した研究活用基盤の共創」（プロジェクトリーダー：小木曾智信）のサブプロジェクト「言語資源の空間接続」（プロジェクトリーダー：大西拓一郎）の研究成果であり、2023年2月に国立国語研究所で行われたプロジェクト公開研究発表会における研究発表（福嶋 2023a）と同年5月にベトナム・ハノイで行われた The fifth International Conference on Asian Geolinguistics (ICAG-5) で行った英語による研究発表（Fukushima 2023a）の内容をもとに新たな地図を加えて書き直したものである。ICAG-5での研究発表は Proceedings の一部として以下に公開されている（Fukushima 2023b）（<https://doi.org/10.5281/zenodo.8382130>）。また、JSPS 科研費 JP19K00555 の支援を受けた。

徴である。『世界百科大事典』（ジャパンナレッジ）の「木綿」によると、日本で綿栽培が一気に広がったのは戦国時代末期だと言われる。木綿はその保温性や綿花から容易に糸とすることができる利点もあって、江戸時代以降のその普及はいちじるしく、麻・苧・藤・くず・しなのきなどの在来の繊維で作られた衣服にとって代わったとされる（文化庁（編）1992:1）。

データを収集する中で、サックリの名称は、織物の名称から、その布で作った仕事着の名称へと拡張していることがわかった（福嶋 2023b）ので、名称を収集するとともに、その名称が何を指して使われているか（すなわち、指示物）もあわせてデータ化し、地図化した。また、先行研究を調査する中で、裂き織りに関連する名称としてツツレとボロなどがあることがわかった（中村 1984）。「ツツレ」と「ボロ」は『日本国語大辞典』で以下のように定義されている。なお、「つづれにしき（綴錦）」は「つづれ織り」と同意である。

つづれ【綴・襤褸】 (1) 破れた部分をつぎ合わせた衣服。つぎはぎの衣服。転じて、ほろの着物。つづれごろも。らんる。(2) 「つづれにしき（綴錦）」に同じ。(3) 「さきおり（裂織）」に同じ。

ほろ【襤褸】 (1) 着古して破れている衣服。ほろぎもの。(2) 使い古して役だたない布。つづれ。ほろきれ。補注：物が破れているさまを表わす擬態語「ほろほろ」から出た語。

そこで、地図の分析に当たっては、①名称の分布に加え、その指示物（referent）の分布を整理すること、また、②裂き織りを表す名称として、サックリ以外の名称も調査すること、という二つの方針をたてた。

方言地図において指示物がとりあげられた例を二つ示す。いずれも出雲の山間部で調査をしたときにわかったことである。まず、柴田・福嶋（1981）所収のメダカの名称の分布図において、山間部にはメダカがないため、メダカを指すとして得られた名称が実はハヤなどの稚魚を指していた。しかし、「めだかであるかどうかとはかかわりなく、川にいる小さな魚の名称は海岸部のめだかの名称とつながっているようで」あった（柴田・福嶋 1981: 15）。もう一つの例として、福嶋（1982）所収のハハコグサの名称の分布図がある。出雲山間部での調査では、ハハコグサの名称におけるハーコ・ホーコの分布を明らかにするために、ハハコグサの絵を見せ、もち草に使うというヒントとハーコ・ホーコの名称を示して調査をした。すると、1年目の調査中に、ハーコ・ホーコは山間部の多くの地点でハハコグサではなく、ある樹木の葉っぱ、具体的にはヤマボクチの葉を指していることがわかった。この地域ではヤマボクチの葉ももち草として使われていたので、ハーコ・ホーコと呼ばれていた。そこで、2年目の調査では、名称についてたずねるときにヤマボクチの絵も見せて確認した。

名称およびその指示物を調べる資料として、『日本国語大辞典』の方言のデータと文化庁（編）（1992）（以下、『日本民俗地図』VIII 衣生活とする）を用いた。また、サックリの名称については、山崎（1995）も引用する脇田（1984a・1984b）（以下、脇田 1984a・1984b をあわせて「サックリ考」とする）のデータも用いた。データは Excel で整理し、緯度経度情報を追加して ArcGIS online（esri 社提供）もしくは QGIS を用いて地図化した。

2. 裂き織りに関係する名称の分布

『日本民俗地図』VIII 衣生活により、サックリ類、ツツレ類、ボロ類の分布を示す（図1参照）。裂き織りであるかどうか明示されず、ただ仕事着の名称として使われたような用例も含めて地図化した。サックリ類は日本海側の北陸から北海道まで、ツツレ類は東北地方から九州地方まで分布し、ボロ類はサックリ類・ツツレ類の分布とあまり重ならない地域に点々と分布している。次節以降では、この分布を踏まえて各類の名称と指示物の分布の解釈を行う。

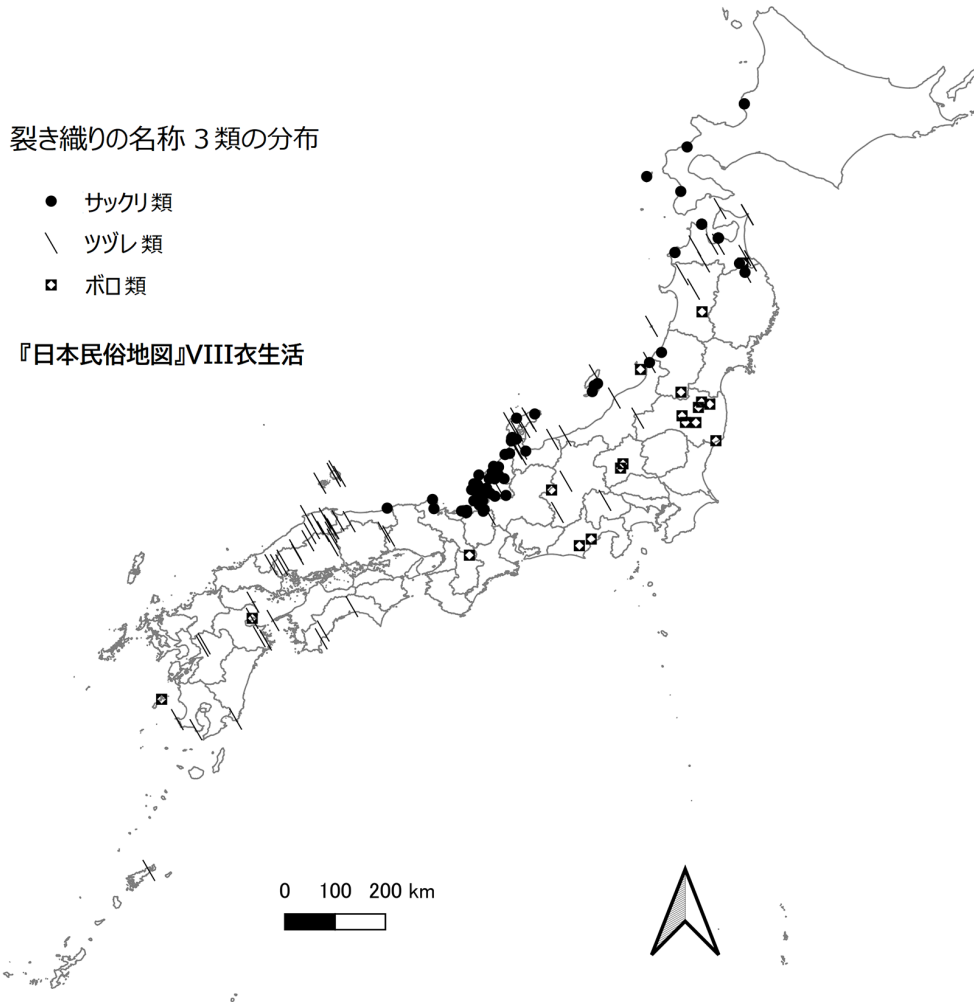


図1 裂き織りの名称 3 類の分布：『日本民俗地図』VIII 衣生活

3. サックリ類の名称と指示物の分布

3.1 サックリ類の名称の分布

サックリ類の名称の分布図を以下の三つの資料により作成した。図2は『日本国語大辞典』、図3は「サックリ考」、図4は『日本民俗地図』VIII 衣生活に基づく。



図2 サックリ類の名称の分布：『日本国語大辞典』



図3 サックリ類の名称の分布：「サックリ考」

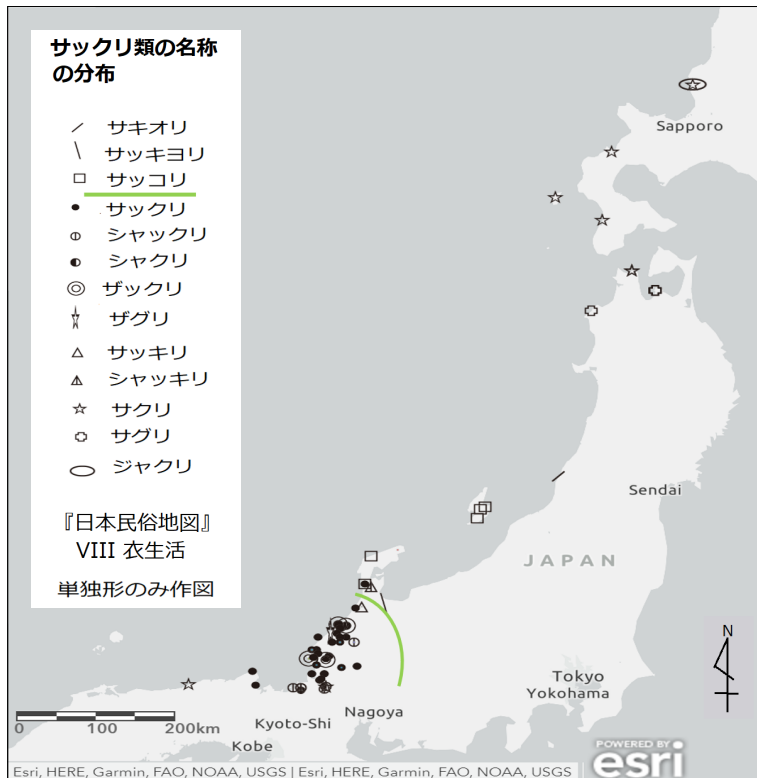
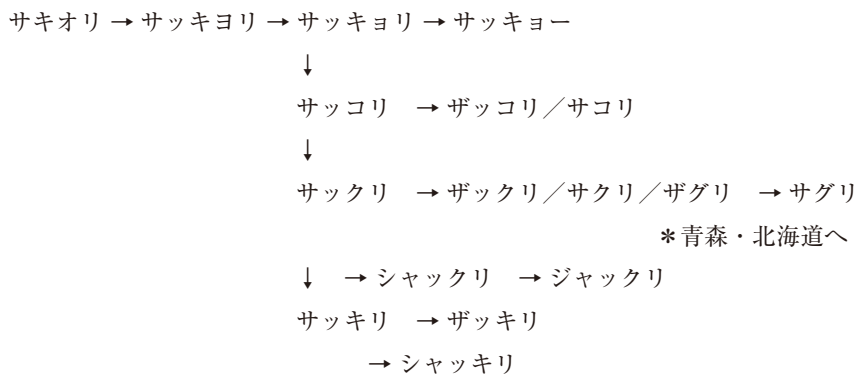


図4 サックリ類の名称の分布：『日本民俗地図』VIII 衣生活

いずれの地図においても中部地方に東部のサッコリなどの -o- 類と西部のサックリなどの -u- 類を隔てる等語線がひかれ、図3で -u- 類の分布の中に -o- 類が残存的に分布することから、-o- > -u- という変化が起きたことが明らかである。また、富山県にサキオリからサッコリへ変化する中間形のサッキヨリやサッキョーが分布している。まとめると、下に示すような変化が起きたと考えられる。なお、図2のザックリは近世資料によるものであり、江戸時代にすでにこの形式になっていることがわかる。



-o- > -u- の変化のあとに, -u- > -i- や $s > z$, $s > sj$ という多様な変化が北陸地方で起きている。なお、語頭の有声化は、同じ地域にオクソザックリ (=麻くずザックリ), カナザックリ (=綿ザックリ) などの複合語があることから、連濁に由来するものであろう。北陸地方で変化して生じたサックリがその後、能登、佐渡へ(図2)、同じくサクリが青森、北海道へ(図4)と広がったと考えられる。この分布の様相から、北前船など日本海航路が果たした役割が想起される。

3.2 サックリ類の指示物の分布

サックリ類の指示物の分布図を二つの資料により作成した。図5は『日本国語大辞典』の方言のデータ、図6は『日本民俗地図』VIII 衣生活に基づく。

サックリ類は本来裂き織りもしくはそれで作った仕事着(作業着)を指していたが、北陸地方を中心とする地域で、仕事着一般や裂き織りで作ったのではない衣料を指す用法が現れたと考えられ、それが青森、北海道へと広がっていることがわかる(図6参照)。サックリ類が男の作業着を指しているところでは、女の作業着が別の名称で呼ばれている。

特に図5・図6で顕著な北陸地方における指示物の多様化の背景として、サックリ類の名称の変化により、サキオリが語源であることがわからなくなったこと(透明度の低下)が考えられる。



図5 サックリ類の指示物の分布：『日本国語大辞典』

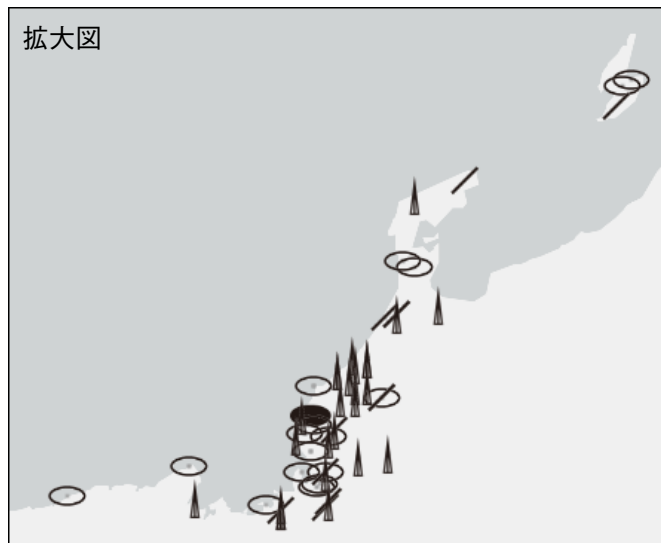


図6 サククリ類の指示物の分布：『日本民俗地図』VIII 衣生活

4. ツツレ類の名称と指示物の分布

4.1 ツツレ類の名称の分布

ツツレ類の名称の分布図を二つの資料により作成した。図7は『日本国語大辞典』, 図8は『日本民俗地図』VIII 衣生活に基づく。

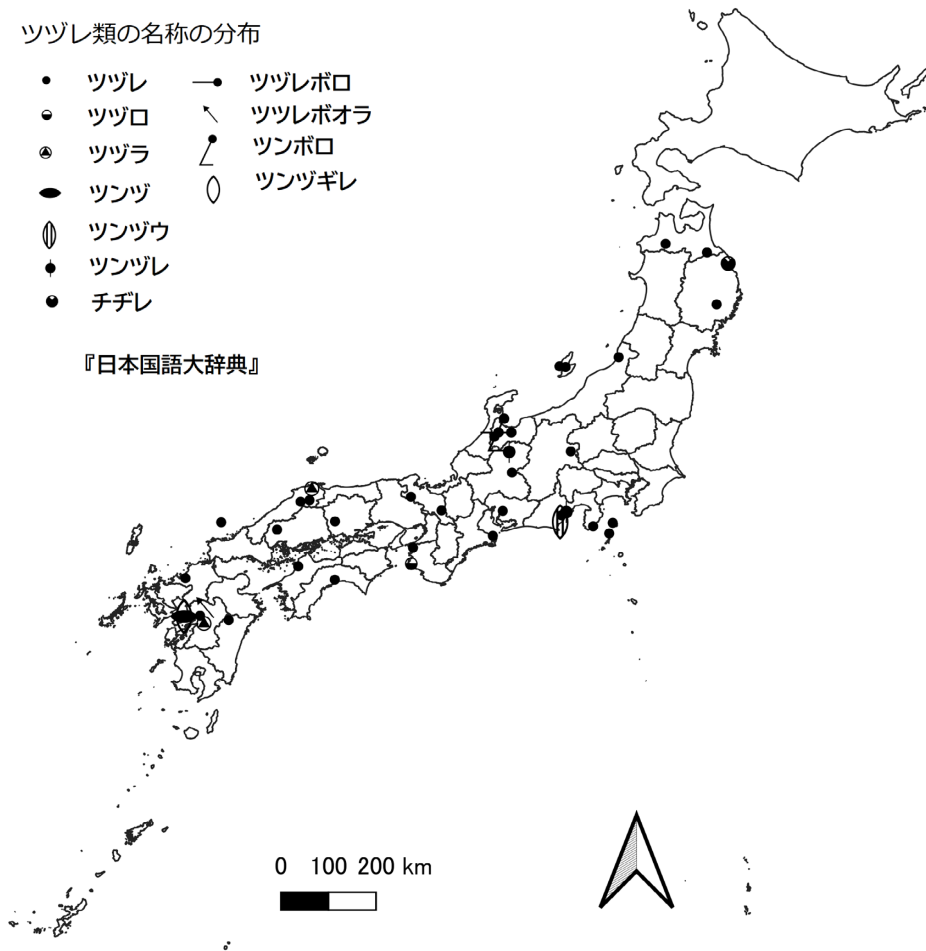


図7 ツツレ類の名称の分布：『日本国語大辞典』

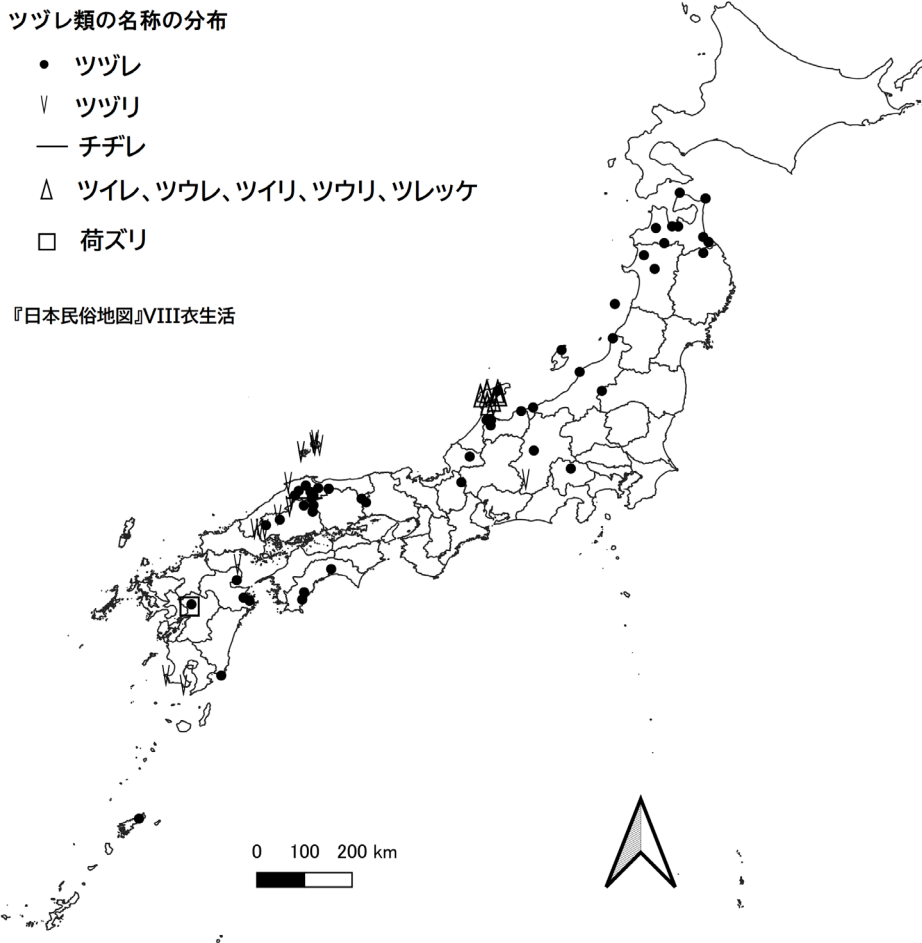


図8 ツツレ類の名称の分布：『日本民俗地図』VIII衣生活

両地図ともツツレ類は東北から九州（最南端は奄美大島）まで分布し多様な語形があるが、局所的な音声変化と見られるものが多い。その中で特筆すべきものは、富山県及び熊本県のツツレポロ、ツンポロ、ツツレポオラというツツレ類とポロ類の混交形（図7）、そして、中国地方のツツリと能登におけるツイレ・ツウレ・ツイリ・ツウリ・ツレツケという変化形（図8）であろうか。分布の広さから、サックリ類に比べて、より長い歴史をもつ古い語と考えられる。

4.2 ツツレ類の指示物の分布

ツツレ類の指示物の分布図を二つの資料により作成した。図9は『日本国語大辞典』、図10は『日本民俗地図』VIII衣生活に基づく。

図9・図10により、ツツレ類が(1)「裂き織りで作った仕事着」を指すのは、中国地方のほか、能登と佐渡であること、(2)「刺し子の仕事着」を指すのは、東北・中部・四国・九州の広い地

域であることがわかる。(1)の分布は日本海航路により広がったように見える一方、(2)の分布は複数の離れた場所にあり残存的である。(2)が古く、(1)はより新しいと考える。一方、(3)「繕いを重ねた着物」と(4)「ぼろ布」は全国に点々と分布していてさらに残存的である。これら(3)および(4)は『日本国語大辞典』の「つづれ」の項目の第一義であり(1.参照)、12世紀後半の出観集や室町時代の伊京集を出典とする用例があるので、さらに古い用法と思われる。以上のことから、(3)「繕いを重ねた着物」・(4)「ぼろ布」から、(2)「刺し子の仕事着」へ、そして(1)「裂き織りで作った仕事着」への変化が起こったと考えられる。

ツズレ類の指示物の分布

- 小布を継ぎ合わせた仕事着。
- / ぼろ布を裂き織りにして作ったそでなしの仕事着。
- ◇ 刺し子の仕事着。
- ▲ 野良着。
- ✎ 繕いを重ねた着物。破れ着物。
- ぼろ布。ぼろ。

『日本国語大辞典』

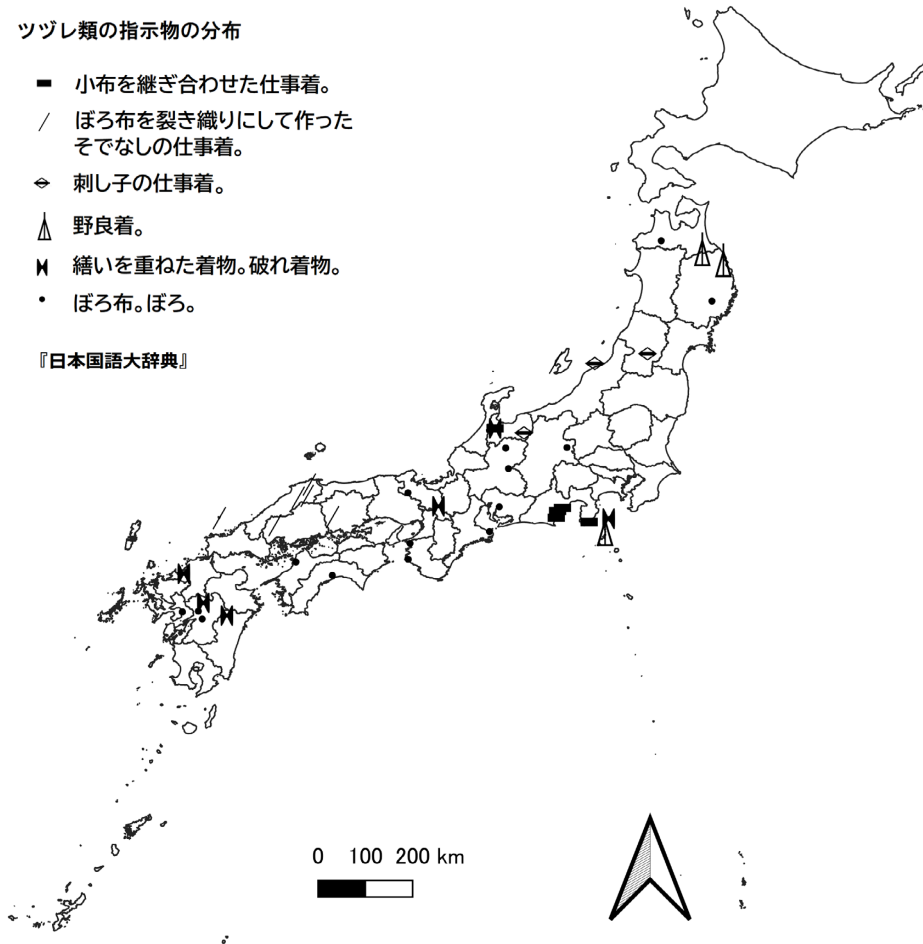


図9 ツズレ類の指示物の分布：『日本国語大辞典』

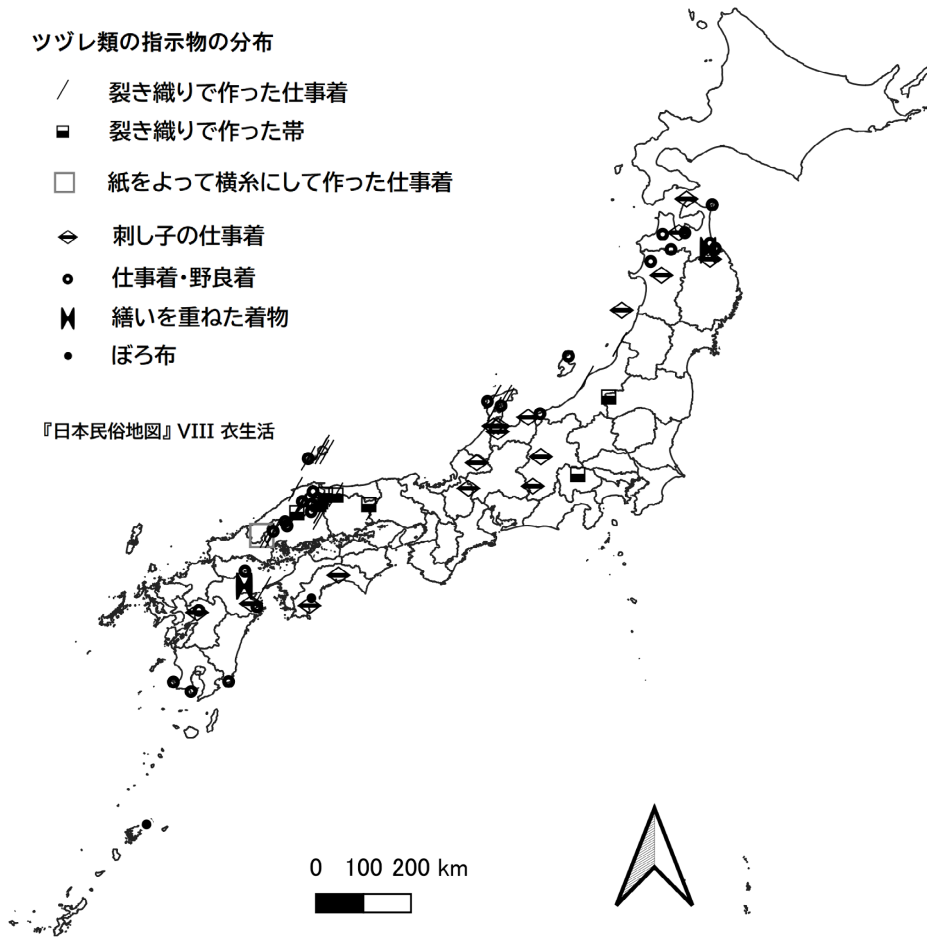


図10 ツツレ類の指示物の分布：『日本民俗地図』VIII 衣生活

5. 多様な裂き織り

中村（1984）は、古木綿布を裂いて横糸に使った典型的な裂き織り以外に、横糸に裂き布を使わないサキオリがあることに注目し、サキオリを三種に分類した。そして、『日本民俗地図』VIII 衣生活などを用いて「サキオリ分布図」を作成したが、その分布図は記号が小さく、見分けにくくて見づらいものだった。中村の分類では、木綿導入以前のものを「麻のサキオリ」と名付け、木綿の導入以後に「木綿布のサキオリ」、「木綿糸のサキオリ」が生まれたとした。大塚他（2003）は、これらを「裂き織り A/B/C」と呼んだ。本稿では、さらに下位区分を加えた分類を示す（表1）。まず、「麻のサキオリ」の変種として、横糸に紙を撚ったものを使ったものを「裂き織り A」とする。また、「木綿糸のサキオリ」の変種として、縦糸（経糸）に麻、藤などを用い、横糸に木綿糸を用いたものを「裂き織り D」、縦糸・横糸ともに木綿糸を使ったものを「裂き織り D'」とする。以上を表1に示した。このような、縦糸・横糸の相違に基づく裂き織りの名称

のバリエーションを「多様な裂き織り」と呼ぶことにする。

この分類に基づき、『日本民俗地図』VIII 衣生活のサックリ類のデータを地図化したのが図 11、ツヅレ類のデータを地図化したのが図 12 である。なお、分類しがたかったものは「作業着」として記号を与えた。また、『日本民俗地図』VIII 衣生活のデータを元に、サックリ類とツヅレ類以外の名称についても指示物の情報を加えて図 13 として地図化した。

表1 多様な裂き織り（福嶋 2023a, Fukushima 2023a, Fukushima 2023b の表を改良）

中村(1984)	縦糸（経糸）	横糸（緯糸）	大塚他（2003）	本稿
麻の サキオリ	麻, 藤など	麻, オクソ, オワタ, 藤, いら, くずなど	裂き織り A	裂き織り A
	麻, 藤など	紙		裂き織り A'
木綿布の サキオリ	麻, 藤など	木綿布を細く裂いたもの	裂き織り B	裂き織り B
木綿糸の サキオリ	木綿糸	木綿布を細く裂いたもの	裂き織り C	裂き織り C
	麻, 藤など	木綿糸		裂き織り D
	木綿糸	木綿糸		裂き織り D'

木綿導入以前の麻・藤などを使った裂き織り A の分布に注目する。図 11 では、裂き織り A は北陸地方の特に石川県南部（加賀）から福井県東部（越前）にかけての地域にたくさん分布する（拡大図参照）。実は同じ地域に、A 以外のすべての変種も分布している。北部の能登を中心とするエリアと南部の京都府北部（丹後）・福井県西部（若狭）エリアには裂き織り B/C（すなわち典型的な裂き織り）が分布している一方、その中間の加賀から越前にかけてのエリアには裂き織り A/D/D' が集中的に分布している。後者は麻・藤などの従来型の植物を活用しているエリアで、木綿糸を導入したのも最近であって、木綿布は活用されていないエリアということになる。いわゆる ABA 分布ではあるが、木綿布を活用した裂き織り B/C が若狭から能登へと日本海航路で広がったと考え、中心部が古いと解釈する。

図 12 に裂き織り A は多くなく、わずかに能登と中国地方の山間部に分布する。これらは、裂き織り B/C の伝播以前の姿が残っていると考えられる。

図 13 をみると、サックリ類とツヅレ類の分布しない地域でも、従来型の植物の繊維や紙を活用した多様な裂き織りがあったことがわかる。古着を活用したボロ類が多く、特に帯の名称として使われていたようだが、麻や藤、くずを活用した裂き織り A, 紙を活用した裂き織り A' が土地土地の名称で呼ばれている。

サックリ類における 多様な裂き織りの分布

- 裂き織りA
- △ 裂き織りA' (紙)
- 裂き織りB, C
- 裂き織りB
- 裂き織りC
- < 裂き織りD
- > 裂き織りD'
- 作業着
- * 刺し子の着物

『日本民俗地図』VIII 衣生活

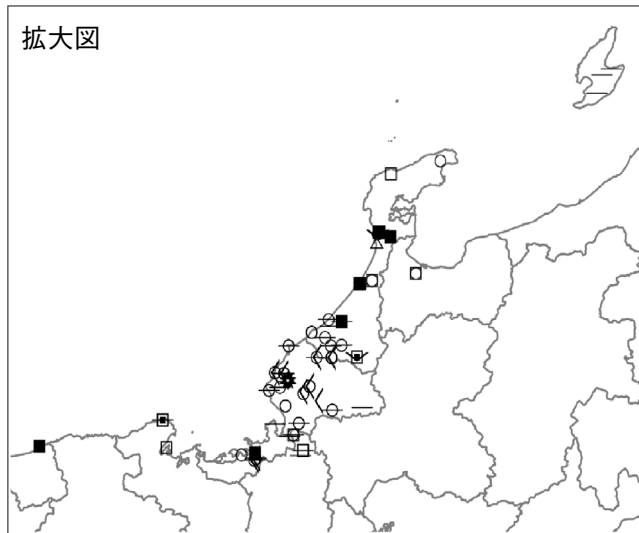
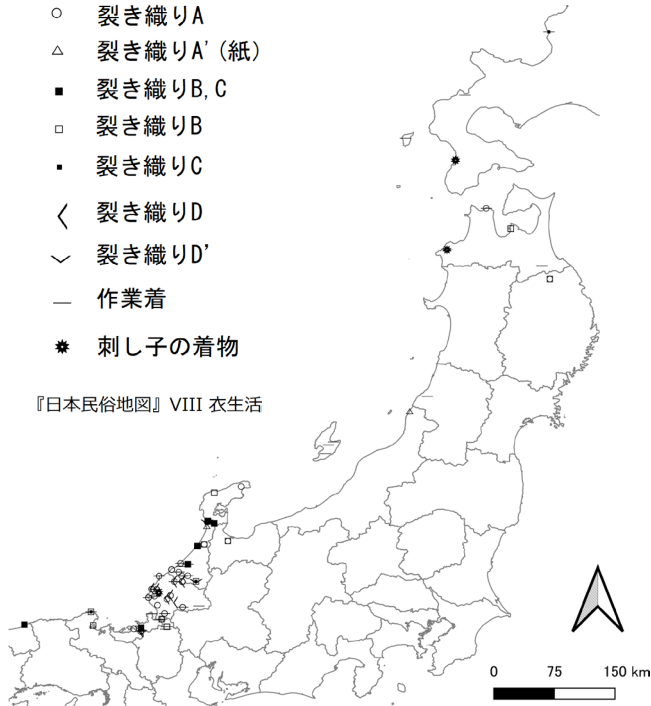


図 11 サックリ類における多様な裂き織りの分布：『日本民俗地図』VIII 衣生活

ツツレ類における
多様な裂き織りの分布

- 裂き織りA
- △ 裂き織りA' (紙)
- 裂き織りB, C
- 裂き織りB
- 裂き織りC
- < 裂き織りD
- 作業着
- ▶ 裂き織りの帯
- * 刺し子の着物
- ↘ つぎあてをした着物
- Y ぼろ布

『日本民俗地図』VIII 衣生活

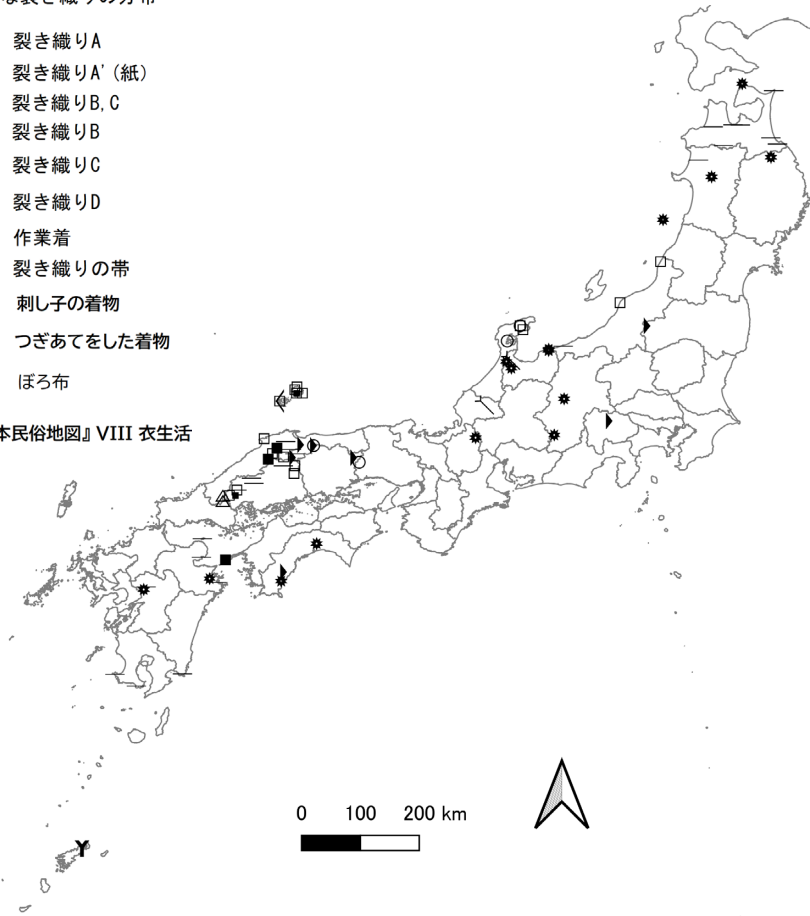


図 12 ツツレ類における多様な裂き織りの分布：『日本民俗地図』VIII 衣生活

裂き織りを表す別の名称の分布（指示物の説明付き）

- ポロ類（ぼろ織り、ぼろ切れ織、ぼろ布）
- ドンジャ
- ▼ オリコ（麻か綿のツツレ糸をよって織る）
- ／ サキオビ（裂き帯）
- ∟ ヤマオビ
- ▣ ウルコギ（裂き織りB）
- ▲ カンジンオリ（裂き織りA'：縦横系とも紙）
- ヨコアサ（オリ）（横麻織り；裂き織りA）
- ← クズヌノ（縦糸：木綿か絹、横糸：くずの繊維）
- ⑥ フジダコ（裂き織りA：藤）
- 📄 カミオリ（紙織り、縦横系とも紙）
- 🍷 ヌノコ（紙をよって作り、横糸にする）
- ◆ シフ（紙布）

『日本民俗地図』VIII 衣生活

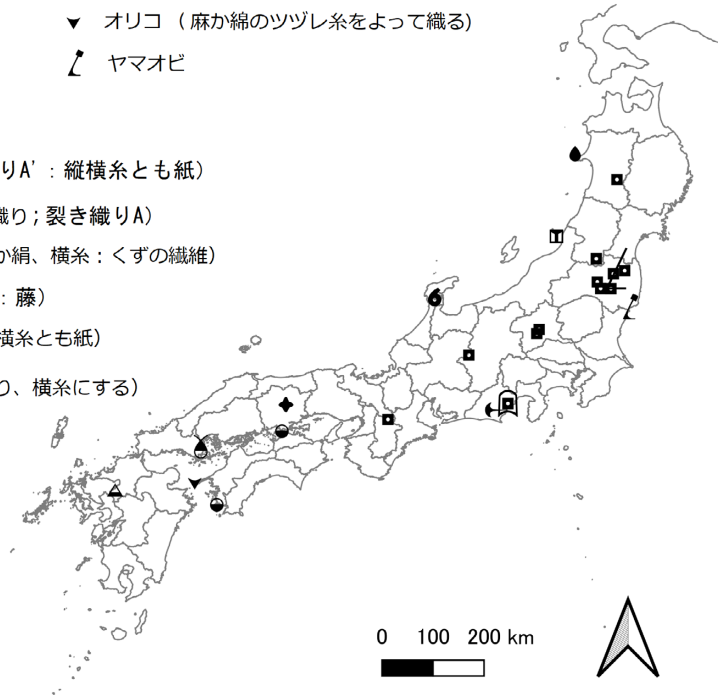


図13 裂き織りを表す別の名称の分布（指示物の説明付き）：『日本民俗地図』VIII 衣生活

6. おわりに

サククリという名称がどうやって生まれたのかについて知りたいと考えて始めた研究であるが、名称の変化は、データをそろえてみると、あっけないほどにきれいに解明できた。一方で、北陸地方の指示物の分布の複雑さはどう考えたらよいか途方に暮れた。その中で、「多様な裂き織り」の視点は有効で、従来型の植物を活用する「裂き織り A/D」対、木綿布を活用する「裂き織り B/C」という整理で、納得のいくまとめができたように思う。一方、ツツレなどの分析も行ったおかげで、サククリ以前の状況が見えてきたのではないかと考える。

はじめは、木綿布を活用する裂き織りの名称が従来型の植物を活用する織物の名称に転用されたと考えていたが、前節のような北陸地方の事例を見るとどうやらそうではないと考えるにいたった。裂き織り以前の裂き織りについて、飯田美苗による以下のような記述がある（飯田 1994: 1）。

今日、「さきおり」というと木綿布を裂いたものを経糸として織り込んだものをいっている。しかし、文献でみる限り、「さきおり」は最初から、そういうものばかりでなかった。又、地域や時代により、「さきおり」の材質も違っていた。

また、脇田雅彦は、岐阜県内外のサックリについての伝承の研究から、経糸・緯糸に「いわゆる木綿以前の植物繊維がほとんど登場して」いるとし（脇田 1984a: 11）、「サックリとは利用される素材を限定しているものではなく、木綿を除いた広義な麻・藤などの一群の織物を指していることをまず指摘できる」と述べている（脇田 1984b: 14）。さらに文献の研究から、「サックリは木綿の無い時代に既に利用されていた名称」であることが見出されたと述べている（脇田 1984b: 19）。実際、寛政元年（1789）頃に比良野貞彦によって刊行された『奥民図彙』によれば、文中に「サキオリハ麻ヲホソクサキテヲリタルナリ」とある（京都府立丹後資料館（編）1995: 17）そうだ。かつてこのようにして麻などで織った着物をサキオリと呼び、その名称がサックリまで変化すれば、典型的な裂き織りはもちろん刺し子の着物を含む様々なものを指すようになっても何ら不思議はないだろう。

麻くずや古木綿布を裂いたものを横糸として作った織物は丈夫で分厚いので、作業着（山着や野良着、漁師の着る上衣など）として最適である。織物の名称からそれで作った衣服、特に作業着の名称に転じるのは自然である。また、布を何枚も重ねて縫った刺し子も作業着として同様の特徴をもつ。だからこそ、サックリとツツレがともに裂き織りや刺し子で作った作業着の名称として使われているのであろう。

参考文献

- 飯田美苗（1994）「文献からみる青森の『さきおり』」『（財）稽古館研究紀要』1: 1-3.
- 大塚康平・植田憲・宮崎清・朴燦一（2003）「自然循環型文化・裂き織りに使用される古布の流通機構—資源循環型造形文化としての裂き織り（1）」『デザイン学研究』50(2): 53-62.
- 京都府立丹後郷土資料館（編）（1995）『特別展：日本海の裂き織り』特別展図録 26. 宮津：京都府立丹後郷土資料館.
- 柴田武・福嶋秩子（1981）『出雲飯石郡中央部言語地図——昭和 54 年度調査資料から』（科学研究費報告書）私家版.
- 中村ひろこ（1984）「サキオリの分布と分類ならびにその系譜」『月刊染織 a』34: 15-17.
- 福嶋秩子（1982）「出雲における『ははこぐさ』方言」『言語学演習 '82』（『東京大学言語学論集』通巻 3）：60-67. 東京大学言語学研究室.
- 福嶋秩子（2023a）「裂き織り・サックリの分布図を読む」『空間接続』プロジェクト公開研究発表会（2023.2.24 国立国語研究所）.
- 福嶋秩子（2023b）「サックリの分布図を読む」『新潟の生活文化』29: 10-13. 新潟県生活文化研究会.
- Fukushima, Chitsuko (2023a) How rip weaving spread in Japan: Interpreting maps of words and referents. Paper presented at the fifth International Conference on Asian Geolinguistics (ICAG-5), University of Social Sciences & Humanities (VNU), Hanoi, Vietnam, May 4-5, 2023.
- Fukushima, Chitsuko (2023b) How rip weaving spread in Japan: Interpreting maps of words and referents. In: Trịnh Cẩm Lan, Trần Thị Hồng Hạnh, Hiroyuki Suzuki and Mitsuaki Endo (eds.) *Proceedings of the fifth International Conference on Asian Geolinguistics*. Tokyo: Geolinguistic Society of Japan. 86-96. DOI: 10.5281/zenodo.8382130
- 文化庁（編）（1992）『日本民俗地図』VIII 衣生活. 東京：国土地理協会.
- 山崎光子（1995）「サックリ文化の変容：三国を中心としたサックリの分布と系譜からみた」『新潟の生活文化』2: 20-25. 新潟県生活文化研究会.
- 脇田雅彦（1984a）「サックリ考（一）—岐阜県を中心に—」『民具マンスリー』16(10): 1-11. 日本常民文化研究所.
- 脇田雅彦（1984b）「サックリ考（二）—岐阜県を中心に—」『民具マンスリー』16(11): 12-21. 日本常民文化研究所.

関連 Web サイト

ジャパンナレッジ『世界大百科事典』<https://japanknowledge.com/> (2023年11月23日確認)

ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』<https://japanknowledge.com/contents/nikkoku/> (2023年11月16日確認)

Reading Maps of Rip Weaving or *sakiori* Words: Distribution Patterns of Words and Referents from the Viewpoint of Forms of Rip Weaving

FUKUSHIMA Chitsuko

Professor Emerita, University of Niigata Prefecture / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

The word *sakkuri* which denotes “workwear” originates from *sakiori* “rip weaving.” While changes in words are typically examined based on their distribution patterns, we examined those of referents using the same method. In addition to *sakkuri*, words *cuzure* and *boro* are also examined. Typical rip weaving utilizes ripped cotton cloth as crosswise yarn (weft), but these words are also used for material whose weft is made of fiber from traditional plant. The referents are examined from the viewpoint of “various forms of rip weaving” to explain the changes in referents.

Keywords: folklore maps, rip weaving, *sakkuri*, *cuzure*, referent